令和６年度　入学式　式辞

　ここ数年の入学式では、桜が終わりかけ、あるいは散っていることが多かったのですが、今年はまさに桜満開の中での入学式となりました。本日ここに、ＰＴＡ会長　梶　健太郎様をはじめ、保護者の皆様のご臨席を賜り、令和六年度、第六十三回入学式を挙行できますこと、心より感謝申し上げます。

　ただ今、入学を許可しました、９９名の新入生の皆さん、入学おめでとう。

　これは、皆さん一人ひとりの、努力の成果であることは勿論ですが、同時に、ご家族や周囲の多くの方々の温情と、ご声援に支えられてのことでもあります。長い間、深い愛情を注いでくださった方々への感謝と、今日の思いを忘れることなく、努力することの大切さを、この機会に改めて、肝に銘じてほしいと思います。

　本校は１９６２年（昭和３７年）の開校以来、常に産業界の要請に応え、時代の変化に対応すべく特色ある教育活動を推進してきました。そして一万人を超える卒業生が、高い工業技術を身につけ、様々な分野で、県内外を問わず活躍されています。その先輩方が勝ち取られた評価が本校の評価となり、県内だけでなく全国的にもトップクラスの求人倍率を誇る、多くの企業から期待される工業高校として成長を遂げました。そのような中、世の中に目を向けますと、コロナ禍、円安、ウクライナ侵攻、イスラエルとパレスチナの紛争、豪雨や地震による大規模災害など、世界は変化の激しい激動の時代を迎えています。かつて、世界の中で日本企業は存在感があり、１９９０年代までは世界トップ５０社の中に多くの日本企業が入っていましたが、今は１社のみです。そのような社会においては、答えを持つことよりも、常に問いを持つことが重要だと本校では考えています。

　ネイティブ・アメリカンには次のようなことわざがあります。「問いを持った部族は生き残ったが、答えを持った部族は滅びた。」例えば、人間は食糧を確保するために、農業や漁業を営んでいますが、時には、天候不良で予定通りの収穫が得られないことがあります。そんなとき、「問い」を持ち続けている人々は、天候不良の際にはどうすればよいのか、対策を考えます。しかし、「答え」を持ち続けている人は、かつての成功体験が常に正しいと思い込み、何も対策を講じることなく、天候不良のたびに同じ失敗を繰り返してしまいます。つまり、「常にこれが正しいことだ」と、最初から「答え」を持っているがために、状況の変化や非常事態に対応できないというわけです。常に問いを持ち、考え続けることが、先の見通せない現代社会においては何よりも重要になります。フォード・モーター社を設立したヘンリー・フォードは「考えることは最も過酷な仕事だ。だからそれをやろうとする人がこんなにも少ないのだ。」と語っています。問いを持ち、考えることは大変です。しかし、この面倒臭いことを楽しむことのできるたくましい脳を目指して、日々トレーニングすることは皆さんがこれからの激動の時代を生き抜く原動力になるはずです

　本校では昨年度より学校教育の最終目的を、自ら考え、判断し、行動できる人になることとし、様々な活動に取り組んできました。登校するときに、制服を着るか、体操服を着るか、

実習服を着るかを自分で考えて決めてよい、自由服装登校期間を三学期限定で試験的に導入しましたが、それも生徒会の皆さんが自分たちで考え、職員会議でプレゼンし、実施するに至りました。本校での学びで問われるのは、できるかできないかではなく、やるかやらないかです。是非自分で考えて、行動してほしいと思います。

最後になりましたが、保護者の皆様に一言、ご挨拶申し上げます。本日はお子様のご入学、誠におめでとうございます。高校での３年間は、多くのお子様にとって、保護者の皆様や、我々教職員が、身近にいて、話をし、時には厳しく諭すことのできる、最後の時間となります。我々教職員は、お子様が、自らの生きる道を、自らが切り拓き、人生の方向を決定できるよう、全力で支援して参りますが、お子様の健全な成長を望み、豊かな個性を育てていくためには、学校とご家庭が、それぞれの役割を果たしながらも、連携を密にしていくことが重要となります。どうか、学校の教育方針をご理解いただき、ご支援とご協力をお願いいたします。

新入生の皆さんが、この敦賀工業高校で、自ら考え、楽しく、様々なことに挑戦する、実り多い高校生活を送られますことを、心から期待して、式辞とします。

令和６年　４月　８日

福井県立敦賀工業高等学校長

玉　井　　淳